

# 令和5年度 夢サポートコース 入学試験問題

## 第1時限

(9時30分～10時00分)

# 国語

### (注意)

- 1 「始め」の合図があるまで、この表紙以外のところを見てはいけません。
- 2 問題用紙は、5ページで、問題は3問です。
- 3 「始め」の合図があったら、まず解答用紙に受験番号・氏名などを記入し、次に問題用紙のページ数を調べて、異常があれば申し出なさい。
- 4 答えは、必ず解答用紙に記入しなさい。
- 5 印刷がはっきりしなくて読めないときは、だまって手を挙げなさい。問題内容や答案作成上の質問は認めません。
- 6 「やめ」の合図があったら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙は裏返しにして、試験官の指示に従いなさい。

都城東高等学校



□ 一 次の問一から問四に答えなさい。

問一 次の五つの単語を国語辞典で配列される順に並べ替えなさい。

洞察 青銅 ブロンズ 茶道 動静

問二 次の(1)～(6)のカタカナ語の意味を選んで、その記号を書きなさい。

- |          |            |            |
|----------|------------|------------|
| (1) フレーズ | (2) ヒエラルキー | (3) キャパシティ |
| (4) イシュー | (5) シナジー   | (6) セラピー   |

【意味】

- |          |        |             |
|----------|--------|-------------|
| ア 階層     | イ 偏屈   | ウ 課題、問題、論争点 |
| エ 成句、慣用句 | オ 相乗効果 | カ 治療、療法     |
| キ 容量、定員  |        |             |

問三 二重傍線部1～5の動詞の活用形を語群から一つずつ選び、記号で答えなさい。

私は「時間を<sup>1</sup>見て<sup>2</sup>動け<sup>3</sup>！<sup>3</sup>急が<sup>4</sup>ずに。」と<sup>4</sup>大きな声で<sup>5</sup>言う<sup>5</sup>。

【語群】 ア 未然形 イ 連用形 ウ 終止形 エ 連体形 オ 仮定形 カ 命令形

問四 次の(1)～(10)の傍線部の片仮名を漢字に直しなさい。

- |                         |               |                |
|-------------------------|---------------|----------------|
| (1) ヨウサン業を営む。           | (2) 湖上のユウラン船。 | (3) 作品をヒビヨウする。 |
| (4) 神社にサンパイする。          | (5) チヨメイ人に会う。 | (6) 団体にカメイする。  |
| (7) ホハバを測る。             | (8) 敵をセイフクする。 | (9) ボウギョに徹する。  |
| (10) 犯人の一味をイチモウ打尽に捕らえる。 |               |                |

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私は、インターネットに、「おとなの小論文教室」というコラムを長く連載している。

連載当初、私の力量では、縮めても縮めても、どうしてもA4にして7〜8ページの文字数が必要だった。いま、自分で読んでも長いと思う。この手の文章に熟達した人なら、一発で「無駄が多い」「短くしろ」「こういう内容を削れ」と言えたと思う。だが、まわりのだれ一人、それを言わなかった。

一回一回全力投球していくうち、やがてそれが、5ページで書けるようになり、気がつくくと3ページで書けるようになっており、ちょっとした感慨があった。連載開始からちょうど3年経っていた。

もしも、最初のころに、ネットコラムの達人が現われ、正しい助言を私にしていたらどうなっていたらどうか。Aぞつとする。

一時期、大量の文字数で書いてみることは、私にとつてどうしても経なければならぬ「プロセス」だった。【I】、短く書くのに3年というのも、私にとって必要な時間だった。自分の感覚としてつかんでいけたからこそ、納得感がある。自分でつかめたということ、3年の間にコツコツと身体に刻まれた習性が、小さいけれど消えない自信になっている。

それをすつとばして、いきなり正解を教えられても、正しいから抵抗できず、でも三年かかったことを、すぐやれるはずもなく、「わかっているのにどうしてできないんだ」と自分を責めたらう。仮に正しい助言にそつて、3年が1年に短縮できたとする。でも、身に刻まれた習性は浅く、それは自分で編み出したものではないから、困った時はまた正解をほしがり、人をあてにする。そこにはもう、失敗をする自由さえない。

人は、自分でつかんでいきたい生きものなのかもしれない。なぞなぞで、もう少しで答えがつかめそうなとき、正解を言われたら、相手を怨むだろう。謎解きをするときのぞくぞくする感じ、わかったときの、頭にパツと電流が走り、すつと腑におちる爽快感。

正論を拒むのは、人間の本能かもしれないと私は思うようになった。正論は強い、正論には反論できない、正論は人を支配し、傷つける。人に何か正しいことを教えようとするなら、「どういふ関係性の中で言うか？」を考えぬくことだ。それは、正論を言うとき、自分の目線は、必ず相手より高くなっているからだ。

<sup>B</sup> 教えようとする人間を、好きにはなれない。相手の目線が自分より高いからだ。そこから見下ろされるからだ。そして、相手の指摘が、はずれていれば、それくらいわかっている、バカにするなど腹が立ち、相手の指摘があたつていれば、自分の<sup>2</sup>ヒが明らかにになり、いっそう腹が立つ。

【II】、学校で、生徒は先生にしょっちゅう腹を立てているのかというところではない。それは、「教えてください」という生徒がいて、互いの合意の上で上下関係ができているからだ。望んでもいない相手に、正論をふりかざすのは、道行く人の首根っこをつかまえるような暴威だ。まして、あなたと<sup>3</sup>タイトウでいたい、あなたより立場が上でいたい、と思つている相手なら、無理やりその座から引き摺(ず)り下ろし、<sup>4</sup>プライドを傷つけ、恥をかかせる。

【III】、相手は、あなたの言っていること<sup>5</sup>コウノウを理解するよりずつとはやく、感情を書してしまう。理性より感情の方が、ずっとコミュニケーションスピードが速い。相手は、あなたを「自分を傷つける人間だ」と警戒する。正論をかざすことで、あなたの相手にたいする「メディア力」は下がってしまう。先にメディア力ありき、相手は、そういう人間からの言葉を受け入れない。だから、あなたの言う内容が、どんなに正しく利益になることでも、なかなかうまくことが運ばないのだ。

<sup>C</sup> 言葉は、関係性の中で、相手の感情に届く。

(出典：山田ズーニー『あなたの話はなぜ「通じない」のか』)

問一 波線部1・4の外来語の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、ひらがなを適切な漢字に直して答えなさい。

- 1 「かてい けいけん かこう せいちょう」  
4 「こうじょうしん ゆうえつかん じそんしん しいよく」

問二 波線部2・3・5のカタカナを漢字で答えなさい。

問三 【Ⅰ】・【Ⅱ】・【Ⅲ】に入る語として最も適当なものを後からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

- 【Ⅰ】 1 たとえば 2 また 3 つまり 4 ただし  
【Ⅱ】 1 かつ 2 なお 3 むしろ 4 では  
【Ⅲ】 1 やはり 2 しかし 3 なぜなら 4 だから

問四 傍線部Aとあるが、それはなぜか。その説明として最も適当な記号で答えなさい。

- ア 失敗を恐れて自分のやり方を探そうとすることなく、助言の方が正しいと納得する癖がつき、それが自信になるから。  
イ 自分の力不足を責めたり、自分に適したやり方を自分でつかむ機会を失うことになっただろうから。  
ウ できないと言うことを自覚しないで、助言者を逆恨みしたりあてにすることになったりするから。  
エ やり方を自分で探す事をせず、教えてもらった方法しか身に付けることができないう人間になってしまったから。  
オ 助言者の言うことが身に付くまで何度もやり直しをさせられ、多量の文字数で書くと言う努力が無駄になったから。

問五 傍線部Bとあるが、これは筆者が人間をどのようなものだと捉えているからか。それを示している部分を十八字以内で書き抜きなさい。

問六 傍線部Cとあるが、言葉を相手の感情に届くようにするためにどうすればいいか、空欄に指示された字数で書き抜き説明しなさい。

(1、十一文字) 立場から正論を振りかざすと、(2、七文字) 相手を支配し傷つける人間だと警戒されてしまうので、相手が(3、十五文字) という納得感があると思われるような関係性の中で相手に言葉が届けられるようにする。

三 次の小説を読んで、あとの問いに答えなさい。

汽車はその時分には、もう安々と隧道を迂りぬけて、枯草の山と山との間に挟まれた、或貧しい町はずれの踏切に通りかかっていた。踏切の近くには、いずれも見すばらしい葦屋根や瓦屋根がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切番が振るのであろう、唯一旒のうす白い旗が「 I I 」<sup>※2</sup>暮色を揺っていた。やつと隧道を出たと思う——その時その<sup>※3</sup>蕭索とした踏切の柵の向こうに、私は頬の赤い三人の男の子が、<sup>A</sup>目白押しに並んで立っているのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃って背が低かった。そうして又この町はずれの<sup>B</sup>※4陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙げるが早いか、<sup>C</sup>いたいたけな喉を高く反らせて、<sup>D</sup>何とも意味の分らない喊声を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのぼして、勢いよく左右に振ったと思うと、

「 I I 」心を躍らすばかり暖かな日の色に染まっている蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降って来た。私は思わず息を呑んだ。そうして刹那<sup>E</sup>一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから<sup>F</sup>奉公先へ赴こうとしている小娘は、その懐に蔵していた<sup>※5</sup>幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切まで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切と、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落する鮮やかな蜜柑の色と——すべてが汽車の窓の外に、<sup>3</sup>瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、或得体の知れない<sup>4</sup>朗らかな心もちが湧き上って来るのを意識した。私は<sup>※6</sup>昂然と頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返って、相不變軼だらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな

<sup>5</sup>風呂敷包みを抱えた手に、しっかりと三等切符を握っている。

(出典：芥川龍之介『蜜柑』)

※1 一旒……一枚。

※2 暮色……夕暮れの景色。

※3 蕭索……寂しい様子。

※4 陰惨……暗くむごたらしい様子。

※5 幾顆……いくつかの。何個かの。

※6 昂然……自信に満ちて意気の盛んなさま。

問一 波線部1～5の漢字の適当な読みを、ひらがなで記しなさい。



